

## 1.はじめに

シカメガキ *Crassostrea sikamea* は、昭和 20 年代に種カキとして対米輸出が行われ、現在、アメリカでは、クマモト・オイスターの銘柄で人気ブランドとなっています。

当センターでは、平成 18 年からクマモト・オイスターの復活に取り組み、平成 18 年は、八代海にクマモト・オイスターが現存していることを確認しました。それらを親として、平成 19 年から稚貝の生産に取り組み、平成 21 年には、100,000 個のクマモト・オイスター稚貝を生産することに成功しました。

ここでは、クマモト・オイスターの復活を目指し、現在まで行った試験の概要と経過を御紹介します。

## 2. 稚貝の大量生産への取り組み

クマモト・オイスターの稚貝生産の流れを図 1 に示しました。

稚貝生産は、まず親貝を良い卵や精子を生むように仕立てることから始まります。仕立ては、水槽の中にクマモト・オイスターの親貝を收容し、仕立てに適した水温に調整して、餌として植物プランクトンを与えて行います。

2 週間程度仕立てたあと、

切開法（メスで生殖巣を切った後、卵を放出させる方法）で採卵と受精を行います。

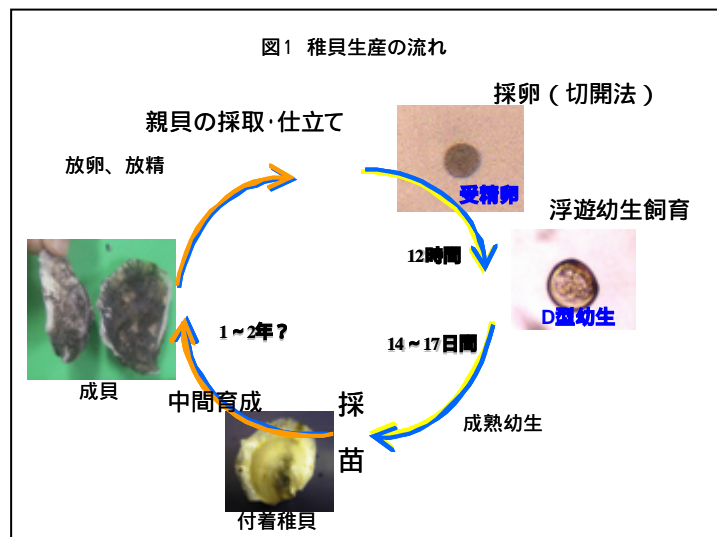
受精後 12 時間程度で D 型と呼ばれる幼生に変態します。この後、2~3 週間海水中で浮遊しながら成熟幼生に成長します。

次に成熟幼生は二枚貝の形に変態して付着稚貝になります。この付着稚貝を 1 ヶ月程度飼育すると 5mm 程度の稚貝ができていきます。

稚貝を生産する上での課題は、浮遊幼生飼育期間の生残率を上げること、採苗時の生残率と変態率を上げることでした。の課題は、適正な餌の量を与えることや、早めに選別を行って、幼生の大きさをそろえてやることで解決できました。また、の課題は、採苗するときの環境条件を改善することで解決することができました。

## 3. 養殖方法を明らかにするための取り組み

漁業者の皆さんがクマモト・オイスターの養殖に取り組むためには、養殖に適した



環境はどのようなものか、安定的に生産するためにはどのような方法が適しているのか、の2点について明らかにする必要があります。

そこで私たちは、平成19年から、熊本県下の数カ所において、当センターで生産したクマモト・オイスター稚貝を用いて養殖試験を開始しました。

試験では、真珠養殖に使われるあんどん籠(図2)や、オーストラリア製のプラスチック製籠(図3)を使用しました。



図2 水産研究センターでの試験実施状況



図3 天草市での試験実施状況

養殖試験における生残と成長の一例を図4に示しました。

飼育開始20ヶ月後までの生残率が75%で大きさ(平均殻高)が75mmに達する試験区がある一方、試験開始後2ヶ月でほぼ全滅する試験区もあり、まだ養殖成績が不安定な状況です。

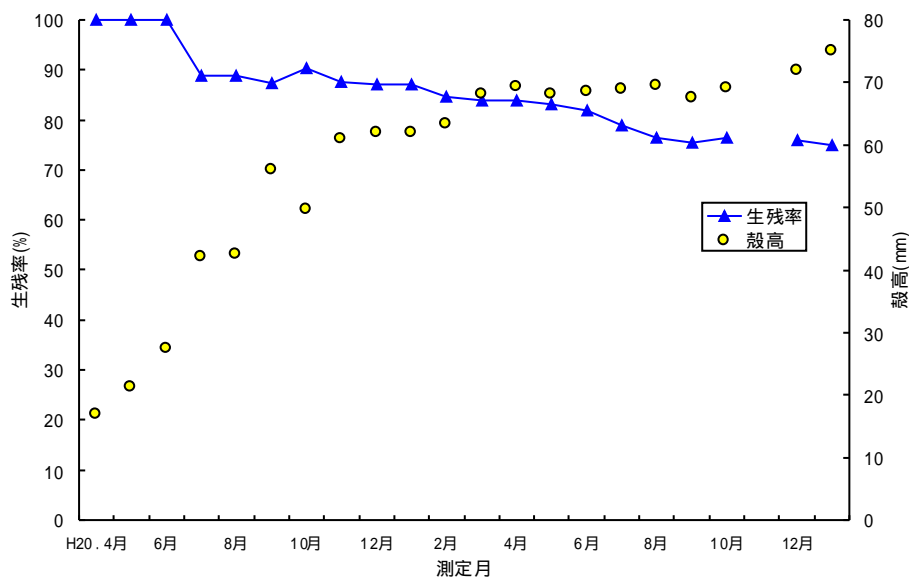


図4 養殖試験結果の一例

このため、平成22年2月から漁業者の皆さんにご協力をお願いして県下各地での養殖試験を行っています。この試験は、県下の9グループに大きさ10mm程度のクマモト・オイスター稚貝を10,000個配布して養殖試験を行うもので、この養殖試験を継続しながら安定的に養殖できる方法を明らかにしていきたいと考えています。